別記様式第７号

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

１．申請者氏名	信清　亜希子
２．審査委員	主　査：連大教授（岡山大学）　佐藤　園 副主査：連大教授（兵庫教育大学）永田　智子 委　員：連大教授（岡山大学）　尾上　雅信 委　員：連大教授（岡山大学）　熊谷愼之輔 委　員：連大教授（岡山大学）　山田　秀和

３．論文題目

探求学習に基づく小学校低学年からの家庭的資質育成に関する教育内容開発研究

４．審査結果の要旨

論文提出による学位申請者　信清　亜希子　から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第１６条に基づき、下記のとおり審査を行った。

論文審査日時：令和５年２月５日（日）　１１時１０分～１２時００分
場所：オンライン会議

（１）学位論文の構成と概要

本論文は、以下に示す、２部・全１１章から構成されている（節以下は省略）。

序　章　本研究の意義と方法
第一部　小学校低学年からの家庭的資質育成に関する教育内容開発研究の理論と方法
第一章　わが国の小学校における家庭的資質育成教育
第二章　普通教育としての家庭科の性格と教育内容編成原理－米国の『ティーン・ガイド』とわが国の家庭経営学習に関する教科書記述の構造分析を中心として－
第三章　小学校低学年からの家庭的資質育成に関する内容編成・授業構成原理－米国N.J.州初等家庭科プログラムにみられる家庭科の性格と内容編成・授業構成原理－
第四章　小学校低学年からの家庭的資質育成に関する教育内容開発研究の理論と方法
第二部　探求学習に基づく小学校低学年からの家庭的資質育成に関する教育内容開発
第五章　家族領域の教育内容開発－小学校第１学年教授書「家族とは何か？」－
第六章　家庭経営領域の教育内容開発－小学校第４学年教授書試案「太陽のオーブン」

第七章　住居領域の教育内容開発－小学校第３学年教授書試案「なぜ、私たちには家庭が必要なのか？」
第八章　被服領域の教育内容開発－小学校第２学年教授書「なぜ、服を着るのか？」－
第九章　食物領域の教育内容開発－小学校第１学年教授書「なぜ、調理するのか？」－
終　章　小学校低学年からの家庭的資質育成に関する教育内容開発の総括と課題

概要は、以下の通りである。

本研究の目的は、普通教育の目標である「家庭的資質育成」を全児童に保障するために、第５・６学年の家庭科に系統的につながる低・中学年の教科横断的な教育内容開発を行い、それを通して家庭的資質育成教育の在り方を考察することにある。それを達成するため、本本研究は、わが国の小学校教育における家庭的資質育成教育の現状・課題から、米国の新家庭科カリキュラムの分析を通して、教育内容開発理論を求めた第一部、それに基づき、第５・６学年の家庭科に系統的につながる５領域の低・中学年の教育内容開発を行い、家庭的資質育成教育の在り方について考察と提言を行う第二部からなる。

第一章では、教科教育学研究の実証的・経験的研究方法論に基づき、わが国の学習指導要領を第一次資料として分析し、小学校教育における二つの家庭的資質育成教育の考え方（昭和20年代と昭和30年代以降）を把握し、その現状と課題（①家庭的資質育成を中心的に担う教科としての家庭科の独自性・意義の問い直し、②第５・６学年の家庭科に系統的につながる低・中学年の教科横断的な教育内容開発の理論・方法の解明）を明らかにした。

第二・三章では、この二つの課題を、規範的・原理的研究方法論に基づき検討している。

第二章では、課題①を検討するため、わが国の家庭科とは対照的な在り方を示す米国で1960年代以降に開発された中等学校段階の新家庭科とわが国の中学校家庭科の教科書記述の教授学的分析を行い、各々の教育内容の構造を求め、そこに具現化されている目標・教育論を比較・考察した。

第三章では、課題②を検討するため、米国N.J.州で1964年に開発され、その実践結果から1978年に改訂された幼稚園～第６学年までの初等家庭科プログラム（以下、HMPと称す）を分析し、カリキュラム構造と内容編成・授業構成原理を抽出し、幼稚園～第６学年の教科横断的な家庭的資質育成プログラムとしてHMPの性格を規定した。

以上の結果から、第四章では、米国の新家庭科にみられた家政学に立脚した探求学習を論理とする教育内容編成・授業構成に、低学年からの家庭的資質育成教育の課題を解決する方向性が求められるとし、現行学校教育体制下における教師レベルでの教育内容開発の方法として、「教授書」開発を提示した。

第二部では、開発的・実践的研究方法論に基づき、第一部で明らかにした「家政学に立脚した探求学習」を理論とする教育内容開発研究を行い、第５・６学年の家庭科に系統的につながる５領域の第１～４学年の教科横断的な「教授書」を開発している。

具体的には、現行学習指導要領の分析から抽出した第１～４学年の「家庭生活に関する学習内容」と第５・６学年の家庭科の内容をHMPの内容と比較・検討し、各領域の根本問題を求め、それを主題とする教授書試案を作成し、第１～４学年の教育課程に位置付けた授業実

践の結果から、試案を修正し、開発した「教授書」を第５～９章で報告している。

以上の結果をまとめ、終章では、普通教育の目標である家庭的資質育成を全児童に保障するためには、わが国のように、家族の一員としての家庭的資質育成をめざし、家庭科は第５学年からしか学べないと考えるのではなく、米国のHMPにみられたように、一人の生活者として自立するための家庭的資質育成をめざし、児童の発達段階に応じた教科横断的な家庭生活に関する学習を第１学年から系統的に行うこと、がより重要であることを提言した。

（２）審査経過

本論文の審査において、主として次の二点について、従前の研究成果を超えるすぐれた成果を収めていることが高く評価された。第一は、普通教育の目標の一つである「家庭的資質育成」に中心的に携わる教科「家庭科」が小学校第５・６学年にしか設定されていないことに着目し、それを第１～４学年の全児童に保障するという視点から、低・中学年の家庭的資質育成に関する教育内容開発研究を行ったことが、論文の独創性として評価された。第二は、教師レベルで可能な開発的・実践的研究の理論・方法論として「探求学習に基づく教科横断的な教育内容開発」と「教授書」を提示し、それに基づき、試行→検証の手順を踏み、小学校教師が現行の教育課程で実践・追試可能な５種類の教授書を開発したことである。これは、教科教育学研究の中心的課題としての「教室における教師主体のカリキュラム開発理論・方法論の解明」と学校教育の「教科の枠組みを越えた資質・能力の育成」とそれを実現するための「教科横断的なカリキュラム・マネジメント」という課題に、実証的に応えうるものとなっている点で評価された。

その一方で、本研究を継続していく上での発展的課題も指摘された。内容開発の理論を米国の新家庭科に求めているが、現代の米国の家庭的資質育成に関する教科等も参照する必要があるのではないか、という課題である。

このように本研究は、教師が教室を開発の場としてカリキュラム・授業開発を行う理論と方法を提示し、これまで検討されてこなかった普通教育の目標「家庭的資質育成」の視点から教育内容開発を行った点に独創性があり、今後の学校教育実践での発展的展開が認められることから、教育実践学の構築に大きく貢献するものであると評価された。

（３）審査結果

以上により、本審査委員会は、　信清亜希子　の提出した学位論文が、博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。